

平勢隆郎著

『八紘』とは何か

(東京大学東洋文化研究所報告)

汲古書院 二〇一二年・三刊

A5 七七五頁 二〇〇〇〇円

本書は、中国の漢代から明代に一貫して「八紘」と称された郡県統治域について、戦国時代から漢代を主対象として、さらに漢以降における「天下」に関する諸概念の変遷を、史料に実際に書かれている記事の比較を通して跡づけたものである。序説「封建論・八紘」論・「五服」論の要点、第一章「八紘」論と「五服」論、第二章「八紘」論と「封建」論、第三章「説話の時代」及び「結びにかえて」の五部構成であり、第一章以下は、著者が二〇〇五年から二〇一一年にかけて国内外で発表した論文十七編を基礎にまとめなおし、さらに修正・増補を加えた上で収録し、「序説」と「結びにかえて」は今回新たに書き下ろした。

戦国時代には、新石器時代以来の文化地域に所謂律令を施行する領域国家ができあがり、戦国以来の軍事的成功を継承した秦の始皇帝がこれらを統一・拡大する。この律令施行域全体を「天下」と称し、漢代以後の『二十四史』では「八紘」とも言う。著者はまず、中国古代の「天下」に関する諸概念の一つである「五服」論について、その概念中の「方千里」の持つ意味が、『論語』『孟子』の時代から『史記』『漢書』等の書かれた漢代にかけて変化する

ることや、後漢の注釈、唐以後の注釈でさらに変化することを指摘する。次に、戦国時代に成立した『春秋』三伝や『論語』『孟子』等の具体的な記事により、戦国各国で生まれた「夏」「中国」等の特別領域が、編纂国それぞれ独自に設定され、大領域たる「天下」の中の中領域とされたこと、『禮記』では新しい設定がなされたことを述べ、また宮崎市定を引用しつつ伝と注釈との違いにも言及する。すなわち、戦国時代における中領域の「中国」及び「五服」と大領域の天下の関係は、漢代に大領域たる「中国」、これ即ち「天下」||「八紘」||「五服」の領域という関係に変わる。さらに遼代以後、「五服」は「八紘」の外に広く設定されるに至ることを述べる。本書では、著者自ら各史料を丁寧に読み込み、各書に込められた各国・各時代の背景を読み解きつつ、これらの「天下」に関する諸概念の形成・変化の過程を明らかにする。そして、編纂者の記述中に見え隠れする、より原初的な中国古代史像を描こうとする。

そもそも春秋時代の複数の大国は、自己の覇権の及ぶ領域内の小国を束ね、互いに外交関係を持っていた。戦国時代には、それが周王と周圉の覇者との関係として回顧され、漢代には王と諸侯との関係に説明し直された。漢代に「中国」が「天下」に等しくなった後、中国皇帝と周圉の国家との外交関係は、冊封関係として整理された。著者は、このことをかつて西嶋定生の述べた「東アジア冊封体制」の成立と位置付ける。本書中では、松丸田獵論についての新たな評価や、増淵龍夫による山林藪沢論の見直し及び再評価も行われており、先学による研究成果を踏まえつつ、著

者による古代史観が表現された大作である。

(鈴木舞)